



(挿絵: 平田美紗子作)

ドローンの活用に向けて

3月号に続き、ドローンの実証実験についてご紹介します。今回は北海道編です。

ドローンの実証実験(北海道)について

平成29年11月に損害保険ジャパン日本興亜(株)、北海道森林組合連合会の御協力により、富良野市でドローンの実証実験を行いました。

具体的には、風害箇所及び霜害箇所において、

- ①概況調査(被害箇所は保険契約箇所か? 事故態様は確認できるか?)
- ②損害区域測量(面積計測の精度は? 図上計測の留意点は?)
- ③標準地調査(幼齢林なら本数のみ、壮齢林なら胸高直径の計測) について行いました。



使用したドローンは鹿児島同様、廉価版のファントム3の外、高性能なものも含めて3機種を用い、また、対地高度を通常(100m)より低く(70m)して実験を行いました。

実証実験の結果、風害については、①ではドローンの活用が可能であることが確認できましたが、②及び③については、被害木の判定を目視で行う場合に誤差が生じる結果となったため、画像解析の手法についての更なる検証が必要であることが分かりました。



▲ドローンで撮影した画像から作成したオルソ化画像(カラマツ林)

平成30年度は特に風害や雪害などに活用するため、更に実証実験を行う予定です。

また、ドローン活用の講習会の開催も予定しており、今後もドローンの導入に向けた取組を進めていきます。

「コンテナ苗基礎知識」

日本では、戦後植栽された人工林が本格的な利用期を迎え、主伐の増加が見込まれています。

そこで、林業機械の効率的な活用、省力化が求められる中、木材の伐採と、伐採跡地の地拵えや苗木の運搬、植栽を速やかに行うため、近年「コンテナ苗」に注目が集まっています。

コンテナ苗は、内面にリブと呼ばれる縦筋状の突起や細長いスリット(縦長の隙間)を設けるとともに、底面を開けた容器で育成した苗木のことで、根が垂直方向に発達して根巻きしない等の特徴があります。また、植栽可能な時期が長いなどのメリットがあります。このメリットを活かして、伐採と造林を一体的に行うことにより、更新作業の低コスト化が期待されています。育苗方法は、各方面で試験研究が進んでおり、全国各地で様々な手法で育苗されています。



▲マルチキャビティーコンテナと呼ばれる専用容器等で育苗。



▲コンテナ苗

コンテナ苗の特徴は各地で様々な試験や考察が行われていますが、コンテナ苗に関する情報の中には、誤った知識も見受けられます。そこで、コンテナ苗に関する最新の知見と技術を取りまとめた「コンテナ苗基礎知識」が、森林総合研究所の協力のもと作成されました(林野庁のホームページに掲載)。低コスト造林に資するコンテナ苗の生産技術については、まだ発展途上であるため、その確立に向けて、今後の技術開発や普及が期待されています。

「コンテナ苗基礎知識」林野庁HP掲載ページ:

<http://www.rinya.maff.go.jp/j/kanbatu/syubyou/syubyou.html>

低コスト化などの努力によって造成された森林であっても、火災や気象災害等はいつ襲ってくるかわかりません。林業経営におけるリスク管理のパートナーとして、森林保険にぜひご加入ください。

写真出典:「コンテナ苗基礎知識(林野庁)」より

森林保険Q&A



しつもん

損害発生日は、どのように認定しているのですか。

気象災害における損害発生日は、一般的には降水量や気温などの気象データを基礎として、気象災害の種類に応じて、損害を最も強く受けたと判断される日、又は異常気象期間の最終日を基準として認定しています。また火災における損害発生日は、通常、消防署等の調査による出火の日としています。